

〈報告〉

生まれ月の差による運動能力, 運動有能感, 生活習慣への影響の検討

中庭 健一^{*,**}・土屋 基^{**}・大津 一義^{**}

Influence on moving ability, physical competence, and lifestyle by difference of the birth moon

Kenichi NAKANIWA^{*,**}, Motoi TSUTIYA^{**} and Kazuyoshi OHTSU^{**}

1. 緒 言

我が国の子どもの運動状況については、運動をする子としない子の2極化, それに伴う運動能力の高い子と低い子の2極化現象が起こっている。この現象の原因として、発達段階の差である、生まれ月の差による影響があると推察される。また、運動能力は運動有能感²⁾⁴⁾や生活習慣¹⁾³⁾などの精神面, 行動面にも関連性が認められているため、生まれ月の差による影響が運動能力のみならず、運動有能感や生活習慣にも影響を及ぼしている可能性があるのではないだろうか。

そこで、本研究では中学生年代における生まれ月の差が、運動能力, 運動有能感, 生活習慣へどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 方 法

平成20年9月から11月にかけて、千葉県I市の中学生1年生~3年生を対象にアンケート調査を実施した。集計はEXCELで行い、1項目でも無回答がある場合は無効とした。有効回答者数は939名であった。質問内容は生まれ月, 運動能力, 運動有能感, 生活習慣である。分析はSPSS15.0J for win-

dowsを使用し、相関分析, 回帰分析, 分散分析を行った。

以下の手順で研究を行った。①運動能力, 運動有能感, 生活習慣の関連性を確認する。②生まれ月の差が運動能力, 運動有能感, 生活習慣にどの程度影響を及ぼしているかを検討する。③生まれ月の群間によって、運動能力, 運動有能感, 生活習慣にどの程度差が生じているかを検討する。

3. 結 果

① 運動能力(握力, 上体起こし, 長座体前屈, 反復横跳び, 20mシャトルラン, 50m走, 立ち幅跳び, ハンドボール投げ), 運動有能感(身体的有能さの認知, 受容感, 統制感), 生活習慣(食事, 休養)の相互の関連性を確認するために相関分析を行ったところ、運動能力と運動有能感, 運動有能感と生活習慣において、有意な関連性が認められた。

② 分析するにあたって生まれ月を、A群(4月~6月生まれ), B群(7月~9月生まれ), C群(10月~12月生まれ), D群(1月~3月生まれ)の4群に分類し、運動能力, 運動有能感, 生活習慣の

表1 運動能力, 運動有能感, 生活習慣の関連性

		運動能力	運動有能感	生活習慣
運動能力	Pearsonの相関係数	—	—	—
	有意確率	—	—	—
運動有能感	Pearsonの相関係数	0.482	—	—
	有意確率	0.001	—	—
生活習慣	Pearsonの相関係数	0.065	0.368	—
	有意確率	0.065	0.001	—

* 千葉県立養護学校

Chiba Municipal School for the Mentally Retarded

** 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科

Graduate School of Health and Sports Science, Juntendo University

表2 生まれ月と運動能力, 運動有能感の関連性

	標準回帰係数	有意確率
総合得点	-0.148	0.002
握力	-0.082	0.016
上体起こし	-0.078	0.021
長座体前屈	-0.073	0.03
反復横跳び	-0.104	0.002
20 m シャトルラン	-0.100	0.003
50 m 走	-0.102	0.002
立ち幅跳び	-0.072	0.033
ハンドボール投げ	-0.084	0.013
身体的有能さの認知	-0.088	0.01

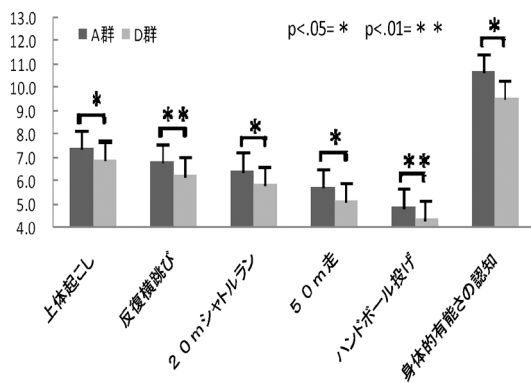


図1 運動能力各種目の生まれ月の群間比較 (A群とD群)

影響を検討するために、回帰分析を行った。総合得点, 握力得点, 上体起こし得点, 長座体前屈得点, 反復横跳び得点, 20 m シャトルラン得点, 50 m 走得点, 立ち幅跳び得点, ハンドボール投げ得点, 身体的有能さの認知得点であり, 有意な差が認められた。

③ 強い影響が見られた運動能力, 運動有能感について, 分散分析を行い, 生まれ月の群の群間比較を行った。総合得点, 上体起こし得点, 反復横跳び得点, 20 m シャトルラン得点, 50 m 走得点, ハンドボール投げ得点, 身体的有能さの認知得点において, 有意な差が認められ, 各種目の群間比較では, 総合得点はA群とB群 ($p < .01$), A群とC群 ($p < .01$), A群とD群 ($p < .001$), 上体起こし得点はA群とB群 ($p < .05$), A群とD群 ($p < .05$), 反復横跳び得点はA群とB群 ($p < .05$), A群とD群 ($p < .01$), 20 m シャトルラン得点はA群とD群 ($p < .05$), 50 m 走得点はA群とB群 ($p < .05$), A

群とC群 ($p < .05$), A群とD群 ($p < .05$), ハンドボール投げ得点はA群とB群 ($p < .05$), A群とC群 ($p < .01$), A群とD群 ($p < .01$), 身体的有能さの認知得点はA群とD群 ($p < .05$)のそれぞれにおいて有意な差が認められた。

4. 考 察

① 運動能力と運動有能感は相互に関連性があることが認められ, この結果は先行研究を肯定するものであった。運動有能感と生活習慣は相互に関連性があることが認められ, この結果は先行研究を肯定するものであった。

② 中学生年代における生まれ月の差は運動能力に強い影響を与えると同時に, 運動有能(身体的有能さの認知)にも影響を与えること明らかとなった。

③ 中学生年代の運動能力や運動有能感を評価するには生まれ月の差による能力差を考慮する必要があると考えられる。

5. 結 論

中学生年代の生まれ月の差は, 運動能力や運動有能感(身体的有能さの認知)に影響を及ぼしており, A群の方がD群に比べ高いことがうかがえた。よって, 中学生年代の運動能力や運動有能感を評価するにはこの点に留意する必要がある。

(当論文は, 平成20年度順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科の修士論文を基に作成されたものである)

参考文献

- 1) 平川和文: 児童・生徒の体力, 運動実施状況, 生活習慣, 心理社会的能力の発達について—兵庫県小・中・高校生の新体力測定の実績から—。体力科学, Vol. 55, 348, 2006
- 2) 森 司朗, 中本康揮, 桐谷昌代: 運動の重要度と親の運動への関わりが幼児の運動有能感の発達に与える影響。学術研究紀要, Vol. 34, 31-39, 2006
- 3) 太田恵美子, 本田維宏, 高橋淑子, 杉原 隆: 運動能力の発達と健康・生活習慣及びあそびとの関係について。日本体育学会大会号, No. 34, 475, 1983
- 4) 武田 正司: 児童における体力と運動有能感との関係; 第2報。盛岡大学紀要, Vol. 23, 67-74, 2006

(平成21年3月31日 受付)
(平成21年3月31日 受理)